

「FX特別レポート」(10/11)

ドル高・円安「壁」突破の微妙

(株)マネー&マネー編集長・吉田 恒

ドル高・円安が続いている。ただ、私の気持ちは正直言って「悩ましい」ものである。理由は、ドル高・円安の「壁」突破の判定がきわめて微妙な状況となっているからだ。

「10%の壁」と115円

ドル高・円安を予想してきた私にとって、それがかりに予想外でもドル高・円安は悪い気のしないものである。

また、私の予測理由の一つに、「10%の壁」という考え方があるが、つまり、長期ドル安の反転相場は、上昇率が10%を完全に超えてくると加速し、「振り向かないドル高」になるというものだ。対円でのドル底値からの上昇率は最近12%程度に達し、まさに「10%の壁」を完全に突破しつつあるようにも見える。

私は、過去に「10%の壁」がドル高加速の結果的な分かれ目となったのは、ここがドル安基調継続派 vs ドル高へ基調転換派の議論で、後者に軍配が上がる目安となってきたからではないかと考えてきた。

ただ今回少し厄介なのは、この「10%の壁」の直後に、115円という重要な境界線が控えていることであり、「10%の壁」突破でも、さらにこの115円を超えない限り、ドル安派とドル高派の議論に決着はつかない可能性もあると思っている。

ところで、そんな重要な115円という境界線を前にして、シカゴIMM統計によると、円はかなり「売られ過ぎ」となっている。また、今朝も書いたように、「株高=円安」といった本来なら矛盾した関係が続いている。

それでも、私の予想に反して一気に115円を突破したなら、それは決して悪い気のするものでもないと思うが、そうではなくて無理の反動として必要以上のドル反落となるのがやはり気になってしまうのである。

実効相場は「ドバイ・サポート」割れ

ところで、1ドル=115円というのは、2003年9月ドバイG7後のドル高値、円安値である。ドバイG7を前後しドルは115円を割り込んでから一段安へ向かった。その意味では、円高と円安の重要な境目といえそうな水準がこの115円である。

ただし、このように対ドルでは115円がドバイ後の円下限であり、それはまだ破られていないのだが、しかし実効相場で見るとすでにこのドバイ後の下限、円の「ドバイ・サポート」は完全に下抜けの動きとなり始めている。

BOE算出の実効相場（1990年の平均を100とした指数）では、円の「ドバイ・サポート」は130になっていたが、じつは先週からそれを大きく下回り始めている。10日現在の円実効相場は129.1であり、これは2003年8月以来の円安値、つまり2003年9月ドバイG7以前の円安水準に、実効相場では早々と戻り始めているのである。

以上見てきたように、ドルは「10%の壁」は突破し始めている。そして実効相場の円「ドバイ・サポート」も底割れしつつある。それでもまだ円安・ドル高加速はないのか。何とも悩ましい状況が続いている。（Y）

